

タイトル：2014 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.9)

日時：2014年11月29日（土）10:00～13:20

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

“Perfect Qualities and Perfection in Each Quality”: The Career and Image of Influential Bureaucrat Zayn al-Dīn ibn Muzhir in the Late Mamlūk Period

太田（塚田） 絵里奈 （慶應義塾大学大学院 文学研究科）

報告内容

後期マムルーク朝、特にカーイトバーイ期において有力文民官僚として権勢を誇ったザイン・アッ = ディーン・イブン・ムズヒル（1428～1488年）は、文民官僚の頂点に位置する文書庁長官（カーティブ・アッ = スィッル）職を26年間という長期間にわたって保持したという点で同時代に類例を見ない。本報告では彼がなぜ長期にわたり権力を維持し得たかという点に焦点を絞り、彼の家系と経歴を年代記、伝記集史料から再構成しつつ、行政官としての業績及び宗教的寄進やウラマーに対するパトロネージ等の私的業績を検討した。同時代史料においてザイン・アッ = ディーンは総じて「理想的官僚」として描写されるが、彼がカーティブ・アッ = スィッルに就任する以前の、財政基盤の確立しない時期からすでに若手ウラマーの育成に注力していた点、スルターンへの執り成しにより高位マムルーク、ウラマーとの共存的な関係構築を目指した点、さらには大規模な慈善事業を通じて自らを「理想的官僚」として意識的に演出した点を史料記述に即して指摘した。

ディスカッション及びランチミーティングにおける質疑

本報告では American University of Beirut の John Meloy 教授がコメンテーターを務めてくださった。Meloy 教授からは、従来のマムルーク朝期の官僚研究においては権力を手中に収めるまでのプロセスに議論が集中しており、権力を維持し得た要因については有機的な分析がなされておらず、本研究の重要性は高いとのコメントをいただき、博士論文執筆に向けた大きな励みとなった。氏のご専門である紅海史との関連では、ザイン・アッ = ディーンがメッカ、メディナに宗教施設を寄進しているほか、息子バドル・アッ = ディーンがシャリーフ間の和解を目的としたスルターン特使として複数回メッカに来訪した事実が認められ、カイロのみならず、ヒジャーズとの関係においても長期的な視点で分析する必要があるとのご指摘を受けた。本報告ではザイン・アッ = ディーンの権力基盤に焦点を当てたが、オスマン朝期以降のムズヒル家の展望に関する質問もいただいた。ムズヒル家としての権力維持について考えるのであれば、当然言及すべき問題であったと反省している。今後はザイン・アッ = ディーンの息子世代との比較を通じ、ムズヒル家及び同時代社会における彼の位置取りをより明確にしていく必要性を強く感じた。

報告会参加の感想

本報告会においては、コメンテーターの先生方が事前に丁寧なコメントを準備してくださったことで、多角的かつ建設的な問題提起をいただき、大いに刺激を受けたことは言うまでもないが、滞在を通じて他にも数多くの貴重な体験をさせていただいた。研究機関としては、**Orient Institut-Beirut** 訪問及び **Institute for Palestine Studies** におけるトルコ人ジャーナリスト **Cengiz Çandar** 氏の講演会に参加する機会をいただいた。本滞在は偶然にもベイルート国際ブックフェアの開催時期と重なり、また **Meloy** 氏のご厚意で **American University of Beirut Press** を直接訪問し、資料収集もできたことは非常に幸運であった。遺跡視察ではファフル・アッ = ディーン二世の居城が置かれていた **デイル・エル = カマル** 及び **バシール・シハーブ二世** の **ベイト・エッ = ディーン** 宮殿を訪問し、国家としてのレバノンのアイデンティティーを知る上で、貴重な経験となった。滞在全体を通じ、日本では得難い時間を過ごさせていただいた。諸般において目配りをしてくださった先生方及び事務局の皆様に、心から御礼申し上げます。